



コラム Column

家畜ふん尿のリサイクルについて

高橋 義文

最近、リサイクル(Recycle)という言葉をよく見聞きする。リサイクルという言葉は、厳密に言えば異なる部分もあるであろうが、循環型社会の“循環”という接頭語とおおむね同義であると聞いている(循環とは、生産から消費までを行う動脈部門と、処理・再資源化などを行う静脈部門の統合を目指すものである)。

一般的に、リサイクルは狭義のリサイクルと広義のリサイクルとに分けられる。前者の狭義のリサイクルとは、1R、つまり材料再生(マテリアルサイクル)、熱回収(サーマルサイクル)などのリサイクルを意味する。後者の広義のリサイクルとは、3R、すなわちリデュース(Reduce: 生産に投入する材料自体を減らすこと)、リユース(Reuse: 再使用すること)、そして前述した狭義のリサイクルを意味する。さらに近年のヨーロッパでは、リサイクルそのものを減らすように事前に無駄な包装などを断るリヒューズ(Refuse: 無駄なものは断る)なるものが加わり4Rになりつつあるようだ。

このようなリサイクルの考えかたは、昨今の環境問題の深刻化を鑑みれば納得がいく。当然、農業分野においても新しいリサイクルが行われ始めている。代表的な例を挙げれば、家畜ふん尿、いな藁、残渣などの有機性資源EM菌などの発酵資材を利用した循環利用である。有機性資源の循環利用とは、先に挙げた家畜ふん尿やいな藁などを堆肥発酵させ、肥料として利用することである。このような

有機性資源を循環利用した農業は古くから行われており、化学肥料のない江戸時代において有機性資源はグッツ(価値のある財)であった。そのため、需要と供給の市場メカニズムが自然と発生し、有機性資源のリサイクルが行われたのであろう。

現在、『家畜排せつ物の管理の適正化及び利用の促進に関する法律』の管理基準の猶予期間が昨年11月に終了したことから、再び有機性資源を有効利用する試みが行われている。今回、機会があつて、実際に堆肥の生産・販売を行っている地域の会議に参加し、話を聞くことができた。その中で、私は、堆肥を生産する農家サイドと消費する農家サイドの温度差を感じた。堆肥を生産する畜産農家は、生産の労働力やコストの面から質の良い堆肥を作ることが難しいと主張し、法律上や取りあえず堆肥にすれば良いというスタンスに近い。一方で、消費する耕種農家は質の悪い堆肥を購入するくらいなら化学肥料を使った方が良いというスタンスである。当然、堆肥が化学肥料の代替財としての価値を持たなければ、市場メカニズムは発生せず、円滑なリサイクルは行われないうらう。しかし、畜産農家にとって、上質の堆肥を作るために敢えて莫大な費用や労働力を投資するほどのインセンティブがないのも事実である。ある農家は、500万の設備を借金して作るよりも、従来の野積みや素堀りの管理方式で、罰金を20年間払い続けた方が良いのではないかと吐露する一幕もあつた。

今後は、違法を覚悟で野積みするような農家が現れるのを未然に防ぐためにも、早急に何らかの対策を講じ、有機性資源のリサイクルを確立させる必要があるらう。取りあえず優先すべき課題は、リサイクルを行う前提条件となる堆肥の質についてであらう。もし、堆肥の質が安価に改善されるような技術が開発されるならば、生産者サイドと消費者サイドの温度差も緩和され、需要と供給の関係が充たされ、自然にリサイクルシステムが構築されるといえよう。